

黄海の真只中

不思議なる海難

大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

當時は秒速十

米突の西風

▲當時は秒速十 米突の西風

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

九重丸出動

▲九重丸出動

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

二晝夜半の漂流

▲二晝夜半の漂流

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

何故の沈没ぞ

▲何故の沈没ぞ

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

運送業者の立場から

▲運送業者の立場から

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

電車騒擾事件

▲電車騒擾事件

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

三萬五千圓

▲三萬五千圓

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

小學から大學まで首席

▲小學から大學まで首席

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

飛行成功

▲飛行成功

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

死刑宣告

▲死刑宣告

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

引揚絶望

▲引揚絶望

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

威風短艇を

▲威風短艇を

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

小刀で胸部を

▲小刀で胸部を

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

可演藝案内

▲可演藝案内

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

浪花館

▲浪花館

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

御成座

▲御成座

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

大正館

▲大正館

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

引割大店開祝

▲引割大店開祝

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

日本全國中で

▲日本全國中で

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

母堅子儀

▲母堅子儀

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

森安半次郎

▲森安半次郎

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

小原新三郎

▲小原新三郎

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

▲大連より撫順炭を満載して 一門司へ向ふ途中

▲松昌洋行に 船主として

京城日報

日七十月二年六正大 (頁八七世合刊夕)

皇室中心論 (五)

皇室中心論 (五)
皇室中心論は、政治の中心を皇室に置くべきである、と主張するものである。皇室は、国家の象徴であり、国民の精神的支柱である。皇室の中心性を確立することは、国家の統一と発展の鍵である。皇室は、政治の動向を監視し、必要に応じて指導する役割を果たすべきである。皇室の中心性を確立することは、国家の統一と発展の鍵である。皇室は、政治の動向を監視し、必要に応じて指導する役割を果たすべきである。



筆帳千川前 廟文

大阪より

大阪より
大阪の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。大阪の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。

大坂より

大坂より
大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。

強獨我觀

強獨我觀
強獨我觀は、強国と獨逸の関係を論じたものである。強国は、世界の平和と安定を維持するために努力すべきである。獨逸は、強国と協力して世界の発展に貢献するべきである。強獨我觀は、強国と獨逸の関係を論じたものである。強国は、世界の平和と安定を維持するために努力すべきである。獨逸は、強国と協力して世界の発展に貢献するべきである。

大坂より
大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。

大坂より
大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。

大坂より
大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。大坂の近郊には、多くの温泉地がある。これらの温泉地は、観光客にとって魅力的な場所である。温泉地は、自然の恵みであり、健康と癒しをもたらす。

三日月號出

仕掛箱の中が玩具の金屏風
おとぎの表紙
大公式飛行大會の巻

日本傳説叢書

著名大の朽不
皇進代無本見容内集募大員會

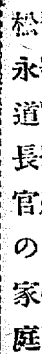
新柄帶側陳列會

二月二十日より
京城本町三越呉服店

生徒募集廣告

第一學年百名
第二學年四十名
私立九州高等女學校

電話二五九二番 本町支店
電話二一九四番
電話一六〇六番 平澤支店
電話二八三三番 東大門出張所



◆結婚後に於いて

22

が無いので思ふやうに行かぬ

けれど



大正 十一年 三月 十日

普通

△其頃は上野の精養軒で

切ひやかた奉^{はら}の手が、いつこしもなく、山^{やま}の色を綴^{つづ}へ
 水の光をあらたに一日^{いちにち}も、人^{ひと}の心に暖^{ぬく}か息吹^{いきぶ}
 を通はせて、若^{わか}き合^あひ、若^{わか}き令^{しづ}息^{いき}を持^もたるほど^{ほど}の家^{いえ}
 庭^{にわ}では今更^{いまさら}にその人達^{ひとたち}の結^{むす}婚^{こん}といふことが考^{かんが}へられま
 す。人^{ひと}の世^よの春^{はる}の紙^{かみ}びの盡^はきせざれ、祈^{いの}らしき若^{わか}き夫^そ
 婦^めに幸^{さい}あれ！と祈^{いの}る親^{おや}心の希望^{きぼう}理想^{りしやう}追^お憶^{おも}ひのいろ／＼
 を同^{おな}つて見^みましだ。

空閑の廣かつた時代がつたので逕信省の關係の人々、各省、先づ知己各國の公使などを招請して上の藩表紙で披露の圖遊覧をしたがの頭は三百圓もあれば立派に出来たものであつたがその後十年と経たずに非常に澤山かゝるやうになり日では又更に多くの費用を要するうになつたらしいが之れでは堪へ

大や今にたそ野蜜
 園位まで高杉五六十錢より二三圓迄
 數圓一圓三十錢より二圓五六十錢
 迄左近の價
 ◇右近の 橘たちばな一圓五六十錢
 より二圓五六十錢六尺部六圓乃至十
 新しあらたい雛人ひなど

形 獲更に使行 而るを以てなす 罪に
生れの與泰吉なることを突き止めた
が同人は早くも逃亡して姿を晦ま
したるも遂に大田繁の手に捕はれ目
下嚴重取調べ中なるが尙餘罪多き見
込みなりと

大津教事件は十六日引續を開廷、齋藤
土より小川作次郎を證人として喚問
し、齋藤計可せられしも、齋半長は作次郎
病氣に就き、回復せば十七日間延すと
申し附、閉廷せり（大阪朝報）

安東縣 製糸工場火災
 五日午前零時安東縣支那町元寶山
 王岐東氏經營に係る作並製絲
 工場の工庫中第四棟のスト
 ー發火四十坪の煉瓦延焼工場一
 棟全焼大正十四年大正十四年
 同業三社同業三社同業三社
 右大正十四年大正十四年大正十四年

石邑縣志
卷之四
職官表

職名	姓名	籍貫	年次
知縣	王德	山西	正統六年
知縣	李德	山西	正統七年
知縣	張德	山西	正統八年
知縣	趙德	山西	正統九年
知縣	孫德	山西	正統十年
知縣	周德	山西	正統十一年
知縣	吳德	山西	正統十二年
知縣	鄭德	山西	正統十三年
知縣	王德	山西	正統十四年
知縣	李德	山西	正統十五年
知縣	張德	山西	正統十六年
知縣	趙德	山西	正統十七年
知縣	孫德	山西	正統十八年
知縣	周德	山西	正統十九年
知縣	吳德	山西	正統二十年
知縣	鄭德	山西	正統二十一年
知縣	王德	山西	正統二十二年
知縣	李德	山西	正統二十三年
知縣	張德	山西	正統二十四年
知縣	趙德	山西	正統二十五年
知縣	孫德	山西	正統二十六年
知縣	周德	山西	正統二十七年
知縣	吳德	山西	正統二十八年
知縣	鄭德	山西	正統二十九年
知縣	王德	山西	正統三十年
知縣	李德	山西	正統三十一年
知縣	張德	山西	正統三十二年
知縣	趙德	山西	正統三十三年
知縣	孫德	山西	正統三十四年
知縣	周德	山西	正統三十五年
知縣	吳德	山西	正統三十六年
知縣	鄭德	山西	正統三十七年
知縣	王德	山西	正統三十八年
知縣	李德	山西	正統三十九年
知縣	張德	山西	正統四十年
知縣	趙德	山西	正統四十一年
知縣	孫德	山西	正統四十二年
知縣	周德	山西	正統四十三年
知縣	吳德	山西	正統四十四年
知縣	鄭德	山西	正統四十五年
知縣	王德	山西	正統四十六年
知縣	李德	山西	正統四十七年
知縣	張德	山西	正統四十八年
知縣	趙德	山西	正統四十九年
知縣	孫德	山西	正統五十年
知縣	周德	山西	正統五十一年
知縣	吳德	山西	正統五十二年
知縣	鄭德	山西	正統五十三年
知縣	王德	山西	正統五十四年
知縣	李德	山西	正統五十五年
知縣	張德	山西	正統五十六年
知縣	趙德	山西	正統五十七年
知縣	孫德	山西	正統五十八年
知縣	周德	山西	正統五十九年
知縣	吳德	山西	正統六十年
知縣	鄭德	山西	正統六十一年
知縣	王德	山西	正統六十二年
知縣	李德	山西	正統六十三年
知縣	張德	山西	正統六十四年
知縣	趙德	山西	正統六十五年
知縣	孫德	山西	正統六十六年
知縣	周德	山西	正統六十七年
知縣	吳德	山西	正統六十八年
知縣	鄭德	山西	正統六十九年
知縣	王德	山西	正統七十年
知縣	李德	山西	正統七十一年
知縣	張德	山西	正統七十二年
知縣	趙德	山西	正統七十三年
知縣	孫德	山西	正統七十四年
知縣	周德	山西	正統七十五年
知縣	吳德	山西	正統七十六年
知縣	鄭德	山西	正統七十七年
知縣	王德	山西	正統七十八年
知縣	李德	山西	正統七十九年
知縣	張德	山西	正統八十年
知縣	趙德	山西	正統八十一年
知縣	孫德	山西	正統八十二年
知縣	周德	山西	正統八十三年
知縣	吳德	山西	正統八十四年
知縣	鄭德	山西	正統八十五年
知縣	王德	山西	正統八十六年
知縣	李德	山西	正統八十七年
知縣	張德	山西	正統八十八年
知縣	趙德	山西	正統八十九年
知縣	孫德	山西	正統九十年
知縣	周德	山西	正統九十一年
知縣	吳德	山西	正統九十二年
知縣	鄭德	山西	正統九十三年
知縣	王德	山西	正統九十四年
知縣	李德	山西	正統九十五年
知縣	張德	山西	正統九十六年
知縣	趙德	山西	正統九十七年
知縣	孫德	山西	正統九十八年
知縣	周德	山西	正統九十九年
知縣	吳德	山西	正統一百年

夫^そを^をし^しな^なや^やか^かに^に
丈^さ長^{ちやう}が^がく
しく^{しく}房^ふ々^つと
漆^しの^のや^やう^うに^に

今年新正月に
 人形
 賣行きよい小型
 市中でボツ／＼飾り始めた雛人形は
 意外に賣れゆきよく十日から三遠吳
 旅店でも雛人形
 陳列會を階上に開いて居
 るがこれも亦近年稀らしく賣行きが
 好いとの事であるが餘り上等物は賣
 れず
 賣行の最も盛んな處は内
 樂三國位の處から十圓まで五入
 樂子が四五圓から十圓内外矢大臣
 左大臣が六七圓官女の三人立三國よ
 七八圓迄

人形は小説では如何にも玩具の如うで引立ちませんが當地ではお客様の方で小さいのを小さいのをご覧なれすので自然と斯んな風に小さく成つて終ひましたですから

◆京城へ来る雖は小さくて上等のものになりますから形の割合には着な方が張つて居ります

●電線切斷犯人逮捕さる

本月三日夜忠南大田市場裏通の電線六十間道及び同五日夜新瀧津に於て同様電線を切斷取替したる曲者あり大田警察署に密告され、警備に當り大田警察中此程大田五木で里物通食料入換案の中此程大田五木で里物通食料入換案の中此程大田五木で里物通食料入換案の中

船體の用意を命じたる如く、猶然と風浪は遠慮なく船體を襲つてゐる。高は四五丈の深度に減じられた三幸山の一等は食堂の櫓子を上つた處にやいへ等々怒濤がやつて来て、櫓子の共、に波に渡はれ其波は甲板の上に山がした格物と一緒に滴を卷いて呀や滴に呑まれんとする處を。

▲辛じて救助し　たが櫓に呑み手を打付けて負傷した夫のみならず吾等の餘れから鯨がハミ出し紅血は甲板の上に流るゝといふ慘狀を呈した斯る暴風に遭遇したのは近年にない。

一十二日朝入港せる神戸丸矣島船長曰く「今日の暴風は由前所から本邦風の今度低氣壓が起つたやうに結構な本國風の渦巻きの中を横断したものであります。」

[illegible]

に互つて猪鬃の類數十頭を奪回し、逃出し、數百官の彈丸を打つ放逐ひに南山邊、縣官が第一頭小川原及び以野猪各一頭六戸氏が野猪一頭計四頭を獲止め目度出で朗歌外き上げた▲中にも六戸氏の獲無慮二十餘貫と號しレモン式五連發の實彈を以て一聲の下り驚したのは手隨いみじくあ當日第一等賞を擧げたといふ▲寺島嶺が黒一物の上級群の來迎して腰を抜き、勢平共に突進を亂打させて其の勢で共に漸く争が出来たのは同情に置すると恩給の意味に猪肉の分配量をしたと云はれ内緒々々の社進

此頃、電燈を照らし、金消し、

ケツ

此頃、電燈を照らし、金消し、

此頃、電燈を照らし、金消し、



本館
西平

あきす

ほくろ



本館
西平

（以下は、この欄の上部にある他の文字の複製）

東京
尾銃也 蘭店
代理府大阪
尾贊平 支店

おいてなすつた」と聞くと梨の精
白と茶の湯の稽古に行つたと答へ
人があるが、之れは甚だお里が知
て面白くないもので家政の整理に
是はれてゐながら事柄らしく梨の稽
古をするやうな餘裕は無い筈であ
らう淺へをするといふのならいけ
なむとも

◆稽古おしますす。

公事するの稽古の代
古古をするといふのも悪い事ではな
いから化粧をするのと同じやうに隠
れてやつて欲しいものである。出来
事なら繕うといふ事は、私の方針とし
は嫁入前に充分仕込んでおきたい
思つてゐる

さん、の窟に山とて京城でも消らしい
 さん、の窟に山とて京城でも消らしい
 越つた確を、と御希望のお客さんも
 くはありますまいがいざお買ひに成る
 ことなれば

◇矢張り 昔しからの型のも
 のでないとお買ひに成られぬから私
 の方でも其針切りの新型を、一々取寄
 せる事は能きません、それに京城であ
 りの人は

◇雑祭云つてもほんの形
 ちばかりで内地の如うに派手でない
 から調度などのよいものも買れませ
 んその上みんな旅をして居るやうな
 心持で居らつしやるので大きな人形
 はどうしても向きませんから御覽の
 通り抑うして

◇小型のものばかりです

定期船臺南
 進針を失ひ
 公る十二日正午大連著の豫定なりし
 期に臺南丸は約九時間遅れ午後八
 時五十分合合に觀望一夜を明して十
 二日午前八時頃頭燈の光陸をなし
 健勝丸、佐藤事務長は交々全度
 難航を物詰つて曰く「七森島通過
 十一日午前十一時頃であれば十二
 日の正午までは餘かに入港が出来る
 船んで居つた甲斐もなく五六十裡
 余合に差懸りしに
 強風は粉雪を交へて吹き
 如めた天候は次第に險惡になつたか
 ら

の大時化
丸の大難航日濟通丸
五十餘裡漂流す

昨年こぞの冬から本年ことしにかけ
那沿岸の時化は馬鹿に激しい上
斯う烈いものだ、本艦のコー
ンに焚であつた所船壳の如く十
半六時半頃に入港するを得たが
地方面からの船舶は思ひやられた
る気象は特別で船舶は御密の通
品宮のやうに白氷が張詰めて居
暴風前に船舶の要所々々を準備
たので

幸ひ船體には別狀なかつ
てつゝ

部小
底の
を香
の味
め止
業
明して
用川理
此
永柱
何れ
てつゝ

トカウツ(トカウ)

[illegible]

生至急入用 163
是に至急應書送附之云
石川病院

年金即時立替 137
期低利長
門外魯錦成町 山口屋
京義錦沙里荒 廣川商店
電話三九二番

年金新長期 138
付に買なし(萬國通社)
昭和十一年一月朝
金銀兩替 京城永興町
角 江州屋本店

募集 規則並贈呈
寄宿舎の設備あり教師之
手 國江商會 127
電話三九二番

ル愛用者が
つしやる
貴話であります

自分の生れた家にあるよりは
く居らねばならぬのであるからそ
の家風に合ふやうに心がけ夫の結
に入るやうにしなければならぬ
れから嫁に結は結婚普通とい
ての草か茶の湯、生花三味線
でも仕込んでおきたいと思つて
が學校の關係で京城にはい、偏
無いので思ふやうに行かねけれ
それは結婚後は實際が厭くなるの
あるから自身に出来ないまでも長
常盤津、清光、祢内、浮瑠璃、
いふやうなものを

◆聽いて解る位の
程度につておきたいと

ふふれである、朝鮮に来てゐる人
中には「奥さんあなたは今何處

も建物
六千圓
昨馬
精治三
明金龍
の山五
△大
△買
増子
五馬
四馬
△黄
五馬
五馬
△猪

[illegible]

本日案内

平二月
總督府郵便局

生氣通	内地四十名	日參集	給奉榮	朝鮮四	人聞
五胡	常帶	二辛來	拾伍員	日鮮	成通
知十五	官報及最寄郵便局	相贈	給上	四人	間

並運送業に多年の経験あり
務を長ずる者皆自前店にあり

(姓名) 佐々木商店

町電止終點
城長谷田三
間大八番地
ゴルシヤルキ

外賣印

廣い世界に
つータター

煉香油
あるばかり

三井物産株式会社

の一部分が、糧に充當せしむるに
 品質優良にして種糧に適すに
 れの方だった、私は逓信省に居て
 秘書官をしてゐて
 逓信省の關係の人、各省の先輩
 各國の公使などを招待して上野
 種養軒で披露の園遊會をしたがそ
 の時、三百圓もあれば立派に出来た
 非常に澤山からなるやうになり今
 では更に多くの費用を要するや
 になつたらしいが之れでは堪らな
 と思つてゐる

◆女は「たび嫁せば

より低良種江品を一万
しむる事とし大正三年より採種園設置

◇調度の 簞笥鉄箱等一組二
から七個位附碗一組三個位から十
個位まで前杯五六十錢より二三圓迄
等同一圓二三十錢より二圓五六十錢
迄左近の標

◇右近の 桶一圓五六十錢
より二圓五六十錢六尺割六圓乃至十
下

新しい雛人形

治
地
附
生
し
る
下

種田五、二町五反、步に
其の收穫種子四百二十石を家
方、に件の電線あるを連絡として
其の歩を進めたる結果犯人は大田
近にて偷行商をなしぬたる群出
れの奥赤吉なることを突き止めた
が同人は早く逃亡して姿を匿ま
たるも遂に大田署の手に捕はれ目
威重取調の中なるが尙餘罪多き見
ゆなりと

天理士よ
申請
病氣
宣し

普及せしむる計畫なりと ▲廿二
 天理教事件
 證人喚問許可
 教事件は十六日引續を開延辯護
 小川作次郎を證人として喚問
 許可せられしと我半長は作次郎
 に就き回復せば十七日開延すと
 開延せり (大阪朝報)
 船の跡
 吳本橋
 白とな
 十五日
 施なる
 工場政
 プより
 榎全橋
 事高は

安東縣 製糸工場火災

午前零時安東縣下郡町元寶山王侯東氏經營に係る柵欄製絲工廠中第四棟のストロ一に火四十坪の棟瓦建同一工場一に同約一千四百分鐵火せるが損傷約一千五百圓製糸機械及六千圓金附七千五百圓なる

るを得てなるなりと乘組は船長(ニ)六名あり何れも顔面火に此世の人と思はれざし

(大連)

平昌地 目的の者員ニ組合員ニスコト

右大正六

依り各郡縣

右大正六

費傳習生募集
 朝鮮總督府
 大正六年二月十七日
 朝鮮總督府官報
 物其ノ他
 詳報ニハ
 鮮總督府臨時土地調查局
 四五千五百本
 大正六年貳月十七日
 鮮總督府官報ニアリ
 地方法院
 原州支廳
 年貳月拾日登記
 查頭ヲ追加シ
 出資口ノ金額ニ達スル迄
 組合加入シ豫約ヲ爲シタル
 方金組含變更登記公告
 正九年に於て
 に普及せしむ

をしまやかに
丈長がく
しく房々こ
漆のやうに
くするは

